

1<sup>st</sup> day  
5.18 Sat.

## 第32回大会 特別報告

■時 間／ 16:30～17:00 ■会 場／ 2F 講堂

テーマ●「健康寿命を延ばす」  
—暮らしの老年学の原理と方法—

三浦清一郎

2<sup>nd</sup> day  
5.19 Sun.

## 第32回大会 特別企画

■時 間／ 9:00～11:30 ■会 場／ 2F 講堂

インタビュー・ダイアログ

1部～幼児期の教育プログラムについて～  
「『鍛える』幼稚園・保育園に問う。—今なぜ幼児鍛錬なのか?—」

戦後の教育論の混迷は現代に尾を引いています。一方で、「のびのび保育」や「個性教育」が論じられ、教育における「子ども中心主義」は彼らの主体的学習を妨げないために、教師は「指導」ではなく「支援」をすればいいということまでできました。他方、保護者は、教育費が家計を圧迫するほど塾やお稽古ごとの「私教育」に金をかけているのに、子どもの体力、耐性はへなへなで、規範意識は低く、いじめは止まらず、学力すらも心配の種だと言います。子どもの潜在的可能性を「鍛えていないからだ」という議論が出るのも当然でしょう。中身はそれぞれですが、埼玉県、島根県、福岡県なども「鍛える教育」を言い出しました。

「子供を楽にする教育か子供を鍛える教育か」（杉田久信）という議論も始まっています。今なぜ幼児鍛錬なのか？今回は「学童保育で鍛える」をテーマに共同研究を実施した大島まな准教授を司会者に、鹿児島県の「ヨコミネ式」保・教育と出雲の鍛える幼稚園に登壇をお願いしてその真意を問う企画です。

### <登壇者プロフィール>

●浜田 満明

（島根県出雲市立 高浜幼稚園 園長）



出雲市立高浜幼稚園長。島根県庁時代は社会教育主事として辣腕を振るった。小学校長として転出後も、野外活動を援用した社会教育的手法を学校に取り入れ、一貫して子どもの体力・耐性を鍛えるプログラムを実施して来た。高浜幼稚園の指導もその延長上にある。「体力と耐力が付けば子どもはどんな活動にも自信を持って挑戦できる」が教育的信念。幼稚園では教育課程上の活動として、日常の生活リズムの中にウォーキングを取り入れた。季節に関わらず、毎日歩く。予算不要、カリキュラム上の配慮不要であり、歩く過程を大事にして自然や人と触れ合う工夫をしている。保護者の評価も得られ、新入園児は増加している。

●矢野やす子

（鹿児島県志布志市 伊崎田保育園 園長）



平成11年4月から鹿児島県志布志市にある純真福祉会「伊崎田保育園」園長。元々は同会所属の別の保育園の調理師として出発。ヨコミネ式保育を提唱している横峯吉文氏にその才を認められ、園長に。子どもは「競争したがる」、「真似をしたがる」、「少しかだけ難しいことをしたがる」、「認められたがる」を保育と教育の基本に据えている。本大会関係者が「園」を視察した際、引き継いだ当初の「伊崎田」を立て直した経緯をお聞きし、その気迫と実績に一目惚れして、登壇を懇請したゆかりの方である。